

おほひ、御やうきう、御かうあり、ながはしにてぐ御ニどあり、ひるはそろくあり。

七夕踊

雜載

慶長六年七月七日、あさ御さか月まるるけふのみあそび、七色詩歌くわんげん、御やうきう、たてばな、御まり、御五、せつけ、せいぐわ、とざま、ないく、いづれもやくしやたち、御しようなり。○下略

〔日次紀事七月〕七日 踊躍

今日洛下兒女結帶爲三

○按ズルニ、七夕踊ノ事ハ、樂舞部踊篇小町踊條ニ在リ。

〔空穂物語祭の使〕七月七日に大將殿にあくる日と、めて、にしのおとよりあをいろに、すはうがさねれうのうへのはかま、みへがさねのはかま、ひとへがさねのあや、かいねりのあこめきたるわらは、かみだけひとしき八人のなかのおとより、あか色にふたあるがさねのあこめはかま、おなじき八人、きたのあとより、うすものにあやかどりかさねたる、をみなべしいろのかざみ、あこめはかまおなじやうにて八人、かたぐよりあゆみいで、おまへのせんざいまへのしだに、そりはしうきはしをわたしつ、いろくのいとどもを一づ、たなばたにたてまつる、つきてすのこに、まきゑのたなつまセツたて、ひさしにみすかけならべ、御てうどいろをつくしなをと、のへ御かづらどもだけをと、のへかずをつくして、がたくにかざられたり、風にきほひて、もの、かどもふきくはへぬところぐなし、節供れいのことあづかり、ことにをしきまゐり、物はおなじかすにまわり、あづかりどもに女のよそひことぐく、本家の御方より、めしならべて給、なみたちてぶたうしたり。

〔源氏物語四十一〕七月七日も、例にかはりたることおほく、御あそびなどもし給はで、つれぐにながめくらし給て、星合みる人もなし、まだ夜ふかう一ところおきる給ひて、妻戸をしあげ給へるに、前栽の露いとしげく、わたどの、戸よりとおりてみわたさるれば、いで給て、